

## 【書評】

高木陽子・高馬京子編

### 『越境するファッション・スタディーズ ——これからファッションを研究 したい人のために』

ナカニシヤ出版、2021 年刊  
208 頁、2500 円＋税

国際ファッション専門職大学  
平野 大

本書は、「越境」をキーワードに、芸術学、言語文化学、文化人類学、メディア論、文化論という多岐にわたる学問領域からファッションを問い直す意欲的な一冊である。本書に所収されている論考はどれも、学問領域を越境しつつ、それぞれのスタイルでファッションと向き合っている。これらの野心的な論考は、我々にファッション・スタディーズの新たな可能性を提示してくれる。

本書の構成は以下のようなものである。

はじめに

#### 第Ⅰ部 地理的・時間的越境

第 1 章 沢辺満智子「蚕の女神——養蚕の技術と信仰の重なりから」

第 2 章 高木陽子「国境を越える着物——和装ファッション文化の発見」

第 3 章 サスキア・トゥーレン「アメリカ東海岸における和装文化の越境——ファッション研究におけるナラティブ分析の可能性」

第 4 章 馬冬・松本健太郎「漢服イメージを介した映像的コミュニケーション——漢服の歴史と、その役割の変化に注目して」

第 5 章 本橋弥生「日本のモダン・ファッション形成期におけるグローバルな視点——田中千代と民俗衣装」

#### 第Ⅱ部 アイデンティティの越境

第 6 章 田中雅一「越境する刻印身体——モダン・プリミティブにおけるスティグマからカリスマへの変貌」

第 7 章 中村寛「ファッションが世界をつくりなおすとき——ヒップホップやストリート文化にみる衣服と身体所作」

第 8 章 門傳昌章「モッドマン——日本における理想の男性の美しさと、ファッション・モデルの役割について」

第 9 章 太田哲「大人男子——若者文化の発生と男性の成熟と未熟」

第 10 章 高馬京子「フランスのファッション・メディアにおける規範的女性像の構築・伝達」

おわりに

本書は第Ⅰ部と第Ⅱ部の 2 部構成である。第Ⅰ部は、地理的・時間的越境をテーマとする論文で構成されている。第Ⅱ部は、アイデンティティの越境という観点からファッションをめぐる事象の考察がなされている。

第 1 章では、養蚕にかかわる人々の営みを「感覚の人類学」という観点から明らかにしようとしている。本章の著者、沢辺満智子は、養蚕という営みにおける身体感覚の重要性に注目する。そのなかで、養蚕の技術的側面とその信仰的側面が含有する意味をつまびらかにする。第 2 章は、和装文化の欧米社会における受容についての論考である。第 3 章でもこのテーマが引き続き論じられる。第 3 章の著者、サスキア・トゥーレンは、アメリカ東海岸における和装文化の受容についてナラティブ分析手法を用いながら考察している。第 4 章においては、漢服のイメージ分析が行われている。ここでは、漢服が中国の国家政策、ソーシャルメディア、観光事業にどのような影響を与えているかについての検証がなされている。第 5 章では、服飾デザイナー、田中千代について論じられる。本章は、民俗衣装研究家としての田中千代の姿に

光をあてている。ここまでが第Ⅰ部である。

第Ⅱ部の冒頭を飾る第6章のテーマは、身体加工された刻印身体についてである。これはまさに、アイデンティティの越境を考える端緒を開く論考といえる。第7章においては、ヒップホップやストリート文化のファッションとそれに伴う身体所作が論じられる。この論考のなかで、中村寛はヒップホップやストリート文化における「規範の枠組みを越境していく力」（本書、x ページ）のあり様を明らかにしていく。第8章は、日本の男性モデルを研究対象とする。それまであまり深く取り上げられてこなかった日本の男性モデルについて、歴史学的分析法と映像人類学的手法を駆使しながらの検証である。大人男子という言葉から日本人男性の精神性のあり処を浮かび上がらせていくのが第9章である。第10章では、フランスと日本での規範的女性像における、それぞれの構造について論じられる。

本書に収められている論文はどれも、「越境」にかかわっている。それらはファッションにまつわる事象をそれぞれ独自の視点で検証する。本書を通じて、評者はファッションの姿を斬新な視座で捉えたフレーズたちに出会うことができた。これらの出会いは評者にとっても大変尊いものであった。

本書評では、評者が本書で出会ったこうしたフレーズを紹介し、それぞれに対する評者の所感を述べていきたい。

まず評者の心を捉えたのが「第1章 蚕の女神」の冒頭文である。

衣服、それは身体と外界との境界に立ち、私たち人間を包むモノである。基本的に四六時中、私たちは身体に衣服をまとっているが、まるでそれは皮膚のように、常に私たちの身体に密着し、人間の身体と外界との境界線上に立って、両者を媒介しつつ、差異化する。(3 ページ)

「感覚の人類学」を専門とする沢辺のこの文章は、衣服を着用する人間の身体感覚を巧みに言語化している。この文章は、ファッションを研究するうえでの、身体感覚の重要性を改めて教えてくれる。衣服の定義としても、「人間の身体と外界との境界線上に立って、両者を媒介しつつ、差異化する」というフレーズは出色のものといえよう（実際、本書評においても何度もこの定義に立ち戻って言及することになる）。

次のフレーズは、和装文化のグローバル化をテーマとする第2章からの引用である。

洋服のデザインの要点は、いかに布を体に沿わせるかを創造するところにある。形の変化こそが流行を決める鍵となり、洋服の生産から消費までの構造（ファッションシステム）を支え、ファッションの変わりゆくものとしての性格を形成している。(20 ページ)

このフレーズは、洋服のデザインとは何かを的確に言いあらわしている。ここで注目すべき点は、このフレーズが洋服のデザイン研究という枠組みではなく、和装文化のグローバル化という文脈で登場していることである。この第2章の論考は和装文化と洋装文化の境界線上に位置する欧米の「着物グループ」を研究対象としている。欧米の「着物グループ」は、和装文化と洋装文化の「境界線上に立って、両者を媒介しつつ、差異化」する。筆者の高木陽子は、欧米の「着物グループ」のメンバーは、和装を「日本文化を理解するためのツール」(26 ページ)としてとらえていると指摘する。彼ら彼女らの活動は、衣文化を通じて日本文化と西洋文化を媒介する役割を果たしている。その一方で、彼ら彼女らは「着付けルールを熟知しているにもかかわらず、創造的着付けを表現する」(29 ページ)などして、差異化も行っている。こうした和装文化と洋装文化の融合の場としての「着物

グループ」を研究テーマとしたことで、日本特有の衣装である着物と洋服の関係性を独自の視点で考察することが可能となったのではなかったか。高木の洋服のデザインに関する鋭い洞察は、越境と融合の場である欧米の「着物グループ」という視座に立ったからこそ、得られたものかもしれない。

第6章では、刻印身体について考察される。ここに登場するフレーズは、身体について重要な視点を提供してくれる。この身体も、ファッションを考えるうえで欠くことのできないテーマである。

自己と身体とのあいだにずれを感じる理由の一つは、身体だけが常時他人に晒されているからだ。他人がいなければ、そして自己の身体を映す鏡がなければ、ずれもそれほど気にならない。ずれは人間の特徴を表すと同時に、社会性の産物でもある。他者との関係で私は身体であり、身体は自己の記号なのである。(96 ページ)

ここでとくに重要なのが、自己と身体とのあいだにある「ずれ」の問題である。ただこのずれはある程度衣服で埋めることができる。というのも身体が自己にとって取り換えがきわめて困難な記号であるとすれば、衣服は変換可能な記号であるのだから。ただここで注意しなければいけないことは、衣服が自己と身体とのずれを埋める力があるとすれば、当然そのずれを拡大させる作用もあるという点である。

本論考のなかで、田中雅一は「性自己同一性障害」(96 ページ)を身体と自己の極端なずれの事例として挙げている。この文脈で評者の頭に浮かんだものがある。近年、いくつかの学校で採用され始めているジェンダーレス制服である。「性自己同一性障害」を持つ学生や生徒にとって制服の存在は、その自己と身体とのずれを拡大させることになりはしな

いか。そうした問題意識に立って登場してきたのがジェンダーレス制服である。しかし、このジェンダーレス制服の採用が即座に、この問題の解決につながるということではなさそうである。2021 年 4 月 2 日付の朝日新聞 EduA の WEB 記事「採用増える『ジェンダーレス制服』、誕生の背景は——トンボのデザイナーに聞く」のなかで、ジェンダーレス制服を製造している株式会社トンボ、デザイナー室のデザイナー・奥野あゆみはジェンダーレス制服について以下のように述べている。

弊社では、「生徒には『ジェンダーレス制服』や『多様性への配慮』を打ち出すのではなく、防寒対策や動きやすさ、肌のコンプレックスなどの解消といった『利便性』を訴えてください」と教員の皆さんにお伝えしています。

というのも、大切なのは生徒の心理的負担にならないことだからです。大々的に「ジェンダーレス」とアピールすることで、当事者にとってありがた迷惑になったり、強制的なカミングアウト(アウティング)につながったりする懸念があるのです。

この奥野の言葉からも、性自己同一性障害が大変デリケートなテーマであることがうかがえる。自己と身体とのあいだのずれ、そしてそれに介在する衣服の存在。それらのあり様は決して一筋縄ではいかないものなのだ。自己と身体と衣服は複雑な関係性を有し、絡み合っている。衣服は、「人間の身体と外界との境界線上に立って」いるだけでなく、自己と身体との境界線上にも立ちながら、「両者を媒介しつつ、差異化」する。人間の存在は、まさにこうした絡み合いに支えられているのだ。

第7章では、ヒップホップについて語られる。そのなかで、中村はヒップホップにお

ける身体・衣服・仕草・所作の重要性を指摘している。

ヒップホップにおいては、表現された内容だけでなく、それがどのような文脈で、誰に向かって、どのように表現されるか——どのような身体で、どのような衣服をまとい、どのような仕草と所作で、どのような声のトーンで——が問われているように思えるのだ。(112 ページ)

そして中村はこの点をふまえたうえで、ヒップホップにおけるファッションの意味について以下のように語っている。

だがこのことは、ヒップホップ文化の体現者にとって、ファッションが単なる「見てくれ」や「スタイル」の問題——日本語の「ファッション」という言葉にはどうしてもそのようなイメージがつきまとう——に回収されるということを意味しない。ヒップホップは、かれらの生き方 (ways of life) であり、世界でのあり方 (ways of being in the world) に根差しているからだ。(112 ページ)

ヒップホップの身体・衣服・仕草・所作は、その実践者の存在そのものに深くかかわっている。というのも、それは、彼ら彼女らにとって生き方であると同時に、世界でのあり方であるからだ。またそれは彼ら彼女らの意思表示でもある。実際、彼ら彼女らはヒップホップの実践を通じて、「世界への抗議、社会的侵犯、文化的再創造」(125 ページ) を行う。そう考えると、第 6 章で田中が指摘した「ずれ」は、何も自己と身体だけではなく、自己と社会のあいだにも厳然と存在しているのではなかろうか。そうした「ずれ」の超越方法の一つが若者にとってのヒップホップといえるのかもしれない。

最後に、ファッション学を研究するうえで、

指針となりそうな一文も引用しておく。

ファッション学は美術史から発展したところが大きく、またファッションや美は個人の主観や解釈によるところが大きい。そのため、現状、疑問、問い、先行研究、分析結果、考察などが明確に分かれている科学や社会科学的研究アプローチ以外にも、人文学的な、研究分析結果をまとめ、書する方法があることを念頭において、議論を展開したい。(132 ページ)

ファッション学は扱う領域が学際的である。それがゆえに、調査分析方法に関しても、さまざまなアプローチが可能となってくる。ただその可能性の多さは時としてファッション学研究者を惑わす要因となる。この門傳昌章の文章は、そうした迷えるファッション学研究者の道標ともなりえるものである。

本書評では、評者の心に響いたフレーズをいくつか引用し、それらのあいだを行き来しながら、そこから得た所感を述べていった。行き来したという聞こえが良いが、ひょっとするとファッション学の広大な地をただ彷徨っていただけかもしれない。本書は、ファッション学の果てしなく広がる可能性を示してくれる一冊である。しかし我々は、ファッション学の、その広さゆえの難しさも肝に銘じておくべきであろう。

〈注〉

1) 「採用増える『ジェンダーレス制服』、誕生の背景は——トンボのデザイナーに聞く」『朝日新聞 EduA』(2021 年 4 月 2 日)  
<https://www.asahi.com/edu/article/14314851?p=2> 2022 年 11 月 16 日閲覧。